新潮文庫

腕くらべ

永井荷風著

新潮社

腕くらべ

定価90円

新潮文庫69 G

昭和二十七年三月二十日 発行
昭和四十三年六月三十日 十七刷改版
昭和四十三年十二月五日 十八刷

著者 永井荷風

発行者 佐藤亮一

発行者 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一一一(大代)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

(塚) 印刷・塚田印刷株式会社 製本・憲専堂製本所
© Hisamitsu Nagai 1952 Printed in Japan

新潮文庫

腕くらべ

永井荷風著

腕くらべ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はしがき

おのれ志いまだ定らざりし二十の頃よりふと戯れに小説というもの書きはじめいつか身のたつきとなして数ればここに十八年の歳月をすごしけり。ああ十八年曾我兄弟は辛苦をなめて十八年親の敵を打って名を千載に伝えおのれはいたずらなる筆をなめて十八年世の憎しみを受け人のそしりをのみ招ぎけり。十八年が同じ月日も用いかたによりて変るためしはもろこしに柳下恵といえる賢者は飴のあまきを嘗めて老いたる親を養わんと申しけるを盗跖とよぶ盗人は人の家の戸に塗り許せぬように引あけて忍入らんといいけるとぞ。さはさりながら敵をねらう兄弟も男と生れしからにはそっと人知れず大磯の濡れ事ばかりは免れず今も昔も男と女客と妓女とのいきさつこれのみ寔に千古不易の人情とや申すべき。それはさて置きおのれ今年の夏より秋にかけて宿痾俄にあらたまり霜夜の虫をも待たで露の命のいとどあやうく思われければ十八年がこの歳月わが拙き文市に出る度毎に購い給いける方々へいささか御礼のしるしまで新に一本をつづりて笑覧に供せんものと思い立ちける折からこの小説腕くらべの一作幸雑誌文明にはわずかに草稿の一部を掲げしのみなれば急ぎ訂正改作してその全篇を印刷する事とはなしぬ。然れどもこれとて未尚全く完結に及べるものにもあらざればいよいよその後篇とも称すべきもの幸いにしてまた来ん春まで命保ち得たらんにはやがて書きつぐべき折もやあらんまずそれまでは読切のもの同様偏に御愛読

を冀(こいねが)うとしかいう。

大正六年冬至の夜

作者識

一幕あい

幕間に散歩する人達で帝国劇場の廊下はどこもかしこも押合うような混雑。丁度表の階段をば下から昇ろうとする一人の芸者、上から降りて来る一人の紳士に危くぶつかろうとして顔を見合わせお互にびっくりした調子。

「あら、吉岡さん。」

「おやお前は。」

「何てお久振なんでしょう。」

「お前、芸者をしていたのか。」

「去年の暮から……また出ました。」

「そうか。何しろ久振だ。」

「あれから丁度七年ばかり引いていました。」

「そうか、もう七年になるかな。」

幕のあく知らせの電鈴が鳴る。各自の席へと先を争う散歩の人で廊下は一時一層の混雑。その為め却て人目に立たないのを幸と思ってか、芸者は紳士の方へちょっと身を寄せながら顔を見上げて、

「ちっともお変りになりませんね。」
「そうかな、お前こそ何だか大変若くなったようだぜ。」
「あら御冗談ですよ。この年になって……。」
「いや全く変らないな。」
吉岡は真実不思議そうに女の顔を目戍るのであった。この前芸者に出ていた頃の事を思合わせるとその時分十七八であったから、七年たったとすればもう二十五六になる訳だ。然し現在目の前に見る姿はお酌から一本になって間もないその時分と少しも変っていない。中肉中丈、眼のぱっちりした下ぶくれの頬には相変らず深い笑靨が寄り、右の糸切歯を見せて笑う口元にはやはり何処やら子供らしい面影が失せずにいる。
「その中、一度ゆっくりお目にかからせて頂戴。」
「何ていって出ているんだ。先の名か。」
「いいえ、今度は駒代ッて申します。」
「そうか。その中呼ぼう。」
「どうぞ……。」
舞台からは早くも拍子木の音が聞える。駒代はそのまま自分の席へと廊下を右の方へ小走に立去った。吉岡は反対なる左の方へと同じく早足に行きかけたが何と思ったか不図立止って後を振向いた。廊下には案内の小娘と売店の女が徘徊するのみで駒代の姿はもう見えなかった。吉岡は有合う廊下の腰掛に腰をおろして巻煙草に火をつけ思うともなく七八年前の事を回想した。二十

六の時学校を卒業し二年程西洋に留学してから今の会社に這入って以来ここ六七年の間というものは、思えば自分ながらよく働いたと感心する程会社の為めに働きもした。株式へ手を出して財産をも作った。社会上の地位をもつくった。それと共に又思えばよく身体をこわさなかったと思う程、よく遊びよく飲んだ。彼はいつも人に向って得々として云う如く誠にいそがしい身体なので、過去った日の事なぞは唯の一度も思返して見るような暇も機会もなかったのである。ところが今夜偶然にも学生の頃始めて芸者というものを知りそめたその女に邂逅して、吉岡は自分ながらどういう訳とも知らず、始めて遠い昔のことに思を寄せたのであった。

何にも知らないあの時分には芸者というものが何となく凄艶に見えた。そして芸者から何とか云われるのが真実嬉しくてならなかった。今日あの時のような初生な清い心持にはなろうと思ってもなれるものではない——吉岡は舞台から漏れ聞える合方の三味線を耳にしながら、始めて新橋へ遊びに来た当時の事を思浮べ、我ながら可笑しくなって独り微笑を漏したが、それにつけて今は遊ぶが上にも遊馴れてしまった身の上に思及ぶと、これは又一寸人には話も出来にくい程万事が抜目なく胸算用から割出されてのみいるのに、自分ながら少し気まりの悪いような妙な気がした。乃公はこんな方面にまであんまり悧巧に立廻り過ぎていた。どうも乃公は知らず知らず細密い処に気がつき過ぎていかんのだと始めて自分を知ったような心持がしたのであった。

全くその通りかも知れない。吉岡は今の会社に這入ってまだ十年にならないのに早くも営業係長の要路に用いられ社長や重役から珍らしい才物だと云われているだけ、同僚や下のものにはあまり受のよい方とは云われない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

吉岡は新橋に湊家という看板を出している力次という芸者をば三年ほど前から世話をしている。然し有ふれた旦那のようにたわいなく鼻毛をよまれているのではない。吉岡は力次の容貌のよくないことはその目で見る通りよく承知している。容貌はわるいが芸はたしかである。何処へ出してもまず姐さんで通れる女である。吉岡は世の中の仕事をして行く上から宴会その他の事で芸者の一人や二人は自分のものにして置く方が却って何かの便利にもなるし又無駄な物費が除けると見て、此方から打込んだような風を見せて手に入れたのであった。

吉岡にはもう一人妾同様にしている女がある。それは浜町に相応な構をしている村咲という待合の主婦である。以前代地辺の料理屋の女中をしている頃、吉岡は芸者遊にも飽きかけた人が往々にして飛でもない厄介を背負込むためしに漏れず、ふと酔ったまぎれに手を出したが、醒めて見るとお茶屋の女中なんぞに手をつけたという事が日頃宴会で出逢う芸者仲間に知られては堪らないと後悔したのが、女の方のつけ目である。一切この事は秘密にして後腐なしにするからという約束で今の待合村咲を開業する資金を内々で出してやる事にした。村咲は運よく繁昌して毎夜お座敷が足りない位の景気。そうなって見ると尠からぬ資金を出しっぱなしにして寄付かないのも馬鹿々々しいと云う気が起って、吉岡は一度二度と呑みに行く中いつか又内所で関係をつけた。おかみは色の白い肉付のいい大柄の女で今年三十になる。素人の女に比較すれば無論垢抜がしているが、さりとて芸者に比べるとそれだけの品がなく又どことなしに濃厚な重苦しい感じがする。即ち花柳界の女中に特有な逞ましい物腰恰好が酔ったまぎれの折々、吉岡の精神ではなくて唯その姪慾を動すのであった。それ故関係をつけては直に後悔し、後悔しては又忽ち関係をつ

けるという始末で、再三焼棒杭になった後今はどうやら腐縁とでも云うような間柄になっているのであった。

吉岡はそれやこれやの複雑な関係に比較して、相手の駒代はたしか十八自分はたしか二十五、互に何が何やら分らずに馴染を重ねたその時分の単純な無邪気な心の中を思返すと、自分ながら何となく芝居か小説でも見るような美しい心持がして来る。美しいだけにたわいがなく又何やら真実らしからぬ変な気もするのであった。

「や、ここにおいでしたか。先刻から方々お尋ねしていたです。」

洋服をきた身丈の低い肥った男。二階の食堂で大分ウイスキイでも傾けたらしく恵比須のような円い顔をば真赤にし鼻の先には玉の汗をかきながら、「さっき電話がかかりました。」

「どこから。」

「いつもの処です。」と身丈の低い肥った男はあたりに人のいないのを見定めて、吉岡の側に腰をおろし、「近頃は湊家の方へはあんまり御出馬がないと見えますな。」

「君のところへ電話が掛かったのか。」

「実は誰かと思って少しは自惚れましたね。ところが例の如くで、われながらチトお気の毒でしたな。はははは。」

「君、力次は今夜僕等がここにいるのを知ってると見えるね。」

「きっと誰か連中の見物にでも来ていたのが知らせたんでしょう。お帰りに是非一寸でいいからお寄り下さるようにという事です。」

「江田君、実はそんな事より今夜は少し珍談があるんだがね。」と吉岡は金口の巻煙草を江田にすすめながら四辺を見廻し、「食堂へ行こう。」

「また浜町の件ですか。」

「いや、そんな旧聞じゃない。ロオマンスだ。」

「え、何です。」

「小説みたような話があるというのさ。」

「そうですか。面白そうですな。」

江田は合槌を打ちながら廊下を地下室の広い食堂へとついて行った。

「君は相変らずウイスキイだったね。」

「いや、今夜は少し廻っていますからビイルにして置きましょう。まだ腰を抜かすにはちっと早過ぎましょうて、ははははは。」

江田は顔中を皺だらけに身体を揺上げて笑いながらハンケチで額の汗を拭く、その様子なりその物云う調子なり誰が見てもすぐ吉岡の幇間(三)と知られるのである。縮れた薄い頭髪は大分禿げ上っているが年はさして吉岡とは違っているのでもないらしい。吉岡の切廻している会社の株式係の一人で、宴会だの園遊会だのある折にはいつも接待係をつとめるところから、営業係長の吉岡さん同様に花柳界には顔が売れている。何処へ行っても〇〇会社の江田さんと云えばお酒の好きな罪のない剽軽な方だと芸者は勿論お茶屋の女中までが心安立に折々は随分失礼な事を云うが江田は決して怒ったことがない。女達から馬鹿にされたり挑戯われたりすると益々調子に乗ってわ

ざと自分から三文の値打もないように自分の身を軽く取扱う。然し家には子供が三人もありその長女はそろそろ嫁の口をさがす年頃だと云う事である。

「珍談とは一体何です。」とボオイの置いて行ったビイルを片手にしながら江田はいかにも聞きたそうに力を入れて、「まさか拙者を出抜いて新色のおのろけじゃ有りますまいね。ははは。」

「実はそう有りたいんだがね。」

「へへえ。これア大分罪が深そうですな。」

「江田君、ひやかしちゃいかんよ。僕は今夜始めて女に迷ったような気がした。」云終って吉岡はあたりに人もやあると見廻したが広い食堂には遠い片隅にボオイが二三人寄って話をしているばかり、見渡すかぎり人のいない卓子の白布に電燈の光の照添うてその上に置いた西洋草花の色をば一層鮮に輝しているばかりである。

「江田君これア真実まじめな話だよ。」

「ははアこの通謹聴しています。」

「いかんなア。いつでも君には冗談ばかり云うもんだから……真剣な話はどうもしにくい実はその何だ。先刻階段の処で偶然出遇ったんだがね……。」

「ふむふむ。」

「僕がまだ学校にいた時分知合った女なんだがね。」

「お嬢さんですか。どこかの奥様になっていると云うんでしょう。」

「気が早いな。素人じゃない。芸者だよ。」

「芸者ですか。して見ると随分早くから御修業なすったもんですね。」
「あれが、その僕が道楽をし出したそもそも一番初めの芸者なんだ。その時分駒三と云っていたんだ。そうさ、一年ばかりも遊んだかな。そうこうする中に僕は学校を出てすぐ洋行するんで、その時には相応にまア片をつけて別れたと思いたまえ。」
「ふむふむ。」と江田は吉岡から貰った金口を惜し気もなくスパリスパリと吸っている。
「七年ぶりで新橋へ出たんだとさ。駒代というんだそうだ。」
「駒代……家はどこです。」
「名前を聞いたばかりだから、自分で店を出したのか、それとも借金をしたのかその辺の事は何にも知らない。」
「外のものに内々で聞いて見ればすぐにわかりましょう。」
「とにかく七年も引いていて又出たんだというから何れ仔細があるに違いないさ。今までどう云う方面の人の世話になっていたんだか、実はその辺の事も知って置きたいんだがね。」
「大分御詮議が細こうございますな。」
「仕方がないさ。こう云う事は始めに承知して置くが一番だよ。友達の女と知らずにくどいて、出来てしまった後で恨まれるなんて云う話はよくあるやつだからな。」
「そう急に話が進んで来ちゃ拙者も愚図々々しちゃいられませんな。とにかく一度お姿を拝んで置きましょうどの辺に居るんです。桟敷ですか。」
「今廊下で見たばかりだから、何処に居るか分らない。」

「お帰りにはどうせ何処へかおいでででしょう。お伴しますからその時ゆっくり手前に鑑定させて下さい。」

「よろしく頼むよ。」

「力次はいよいよ祇王妓女(四)ですな。かわいそうに……ははは。」

「何にあれア.あれで構やせんよ。君も知ってる通りこれまでに随分世話をしてやったからね。僕が居なくなったからって、今じゃ抱も四五人居るし、きまった座敷はあるし、困る事はないさ。」

廊下の方から無遠慮に大きな声で話をしながら這入ってくるお客がある。吉岡はそれと気付いて話を途切した。舞台の方では立廻でもあるのか頻に付板を叩く響がする。

「おいボオイ、勘定……。」

吉岡は椅子から立った。

二　逸　品

「今晩はようこそ……。」と浜崎という待合の女将恭しく手をついて次の間から、「どちらのお帰りでいらっしゃいます。」

「帝国座へさそわれた。藤田さんの義理で女優劇の見物だ。」と袴をぬぎかけていた吉岡は立ったままで、「女優の旦那になるのも並大抵じゃないね。始終見物をこしらえてやらなくちゃならんようだから。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com